

《講演会報告》

クリスティーヌ・バール氏講演会
「目で見るフェミニズムの歴史、1789年-2000年
—カルナヴァレ歴史博物館企画展の背景—」

Lecture by Christine Bard:

*“A Visual History of Feminism, 1789-2000: Behind the Exhibition at the
Carnavalet-History of Paris Museum”*

はじめに

2023年3月2日に早稲田大学戸山キャンパスで早稲田大学ジェンダー研究所主催、日仏女性研究学会、公益財団法人日仏会館、日仏会館・フランス国立日本研究所共催によるクリスティーヌ・バール氏 (Christine Bard) の講演会が開催された。講演会のタイトルは「目で見るフェミニズムの歴史、1789年-2000年—カルナヴァレ歴史博物館企画展の背景—」《Une histoire visuelle du féminisme : dans les coulisses de l'exposition Parisiennes Citoyennes ! Engagements pour l'émancipation des femmes 1789-2000 au Musée Carnavalet》である。

パリのカルナヴァレ歴史博物館では、2022年9月28日から2023年1月29日まで「パリの女性市民たち！ 女性解放のための闘い、1789年-2000年」《Parisiennes Citoyennes! Engagements pour l'émancipation des femmes 1789-2000》という企画展が開催された。この企画展は1789年のフランス革命から2000年のパリテ法制定までの、パリの女性市民たちの女性解放の闘いの歴史をたどるものである。企画展の入場者は9万人を超え、盛況のうちに終了し

た。入場者の80%は女性であった。今回の講演会は、この企画展にキュレーターとした携わったクリスティーヌ・バール氏にその内容、また意義について講演をいただくものである。

主催者である村田晶子早稲田大学ジェンダー研究所所長の挨拶の後、共催者の日仏女性研究学会西尾治子代表によるバール氏来日の経緯の説明に続き、バール氏の講演となった。会場ではフランス語でのバール氏の講演に沿って、その日本語訳と関連する図像がパワーポイントで投影された。本稿では紙面の都合で図像の掲載が叶わなかったため、講演の内容のみを報告する。図像に関しては、カルナヴァレ歴史博物館での企画展のカタログ、*Parisiennes Citoyennes! Engagements pour l'émancipation des femmes 1789-2000* Exposition, Paris Musée Carnavalet-Histoire de Paris, 28 septembre 2022-29 janvier 2023 が東京日仏会館図書室に所蔵されているので、関心のある方はそちらをご参照いただきたい。

クリスティーヌ・バール氏はアンジェ大学の教授で、専門は女性史、ジェンダーの政治史、社会史、文化史の研究である。著書には『マリアンヌの娘たち』*Les Filles de Marianne. Histoire des féminismes. 1914-1940*, Paris, Fayard, 1995、『ガルソンヌ』*Les Garçonnes. Modes et fantasmes des Années folles*, Paris, Flammarion, 1998、『ズボンの政治史』*Une histoire politique du pantalon*, Le Seuil, 2010, 2013など多数ある。日本語に翻訳されているバール氏の論考には「女性の鏡にうつる男らしさ」(鈴木彩土子訳)(アラン・コルバン、ジャン＝ジャック・クルティエヌ、ジョルジュ・ヴィガレロ監修『男らしさの歴史Ⅲ、男らしさの危機? 20-21世紀』、藤原書店、2017年)があり、『ズボンの政治史』も翻訳出版が予定されている。また『フェミニスト事典、フランス18世紀-21世紀』*Dictionnaire des féministes : France, xviii^e - xxi^e siècle*, Paris : PUF, 2017の編者の一人でもある。

バール氏の講演

1. 企画展開催の経緯

最初にバール氏は、この企画展が開催された経緯について以下のように述べた。フランスでは1970年代からアカデミズムの世界で女性史の研究が進められ、ミッシェル・ペロー (Michelle Perrot, 1928-) やフランソワーズ・テボー (Françoise Thébaud, 1952-) をはじめとする研究者の成果が知られるようになった。また近年芸術の歴史におけるフェミニズムの影響が認識されている。こうした流れはこの企画展はもちろん、従来の社会学、政治学、文学等の歴史研究の枠を超えて広範な分野への影響を与えている。

しかしまだ手を付けられていない分野も多数残されている。過去半世紀にわたる幅広い研究にも関わらず、パリの女性の社会史、政治史、文化史を取り上げた著作は存在しない。またフェミニズムの視点からパリという空間や地域を捉えた研究、女性の解放についてパリが歴史の中で果たした役割についての考察もない。こうした点からもこの企画展は画期的なものであった。

そこでバール氏はフランスのミュージアムの現状に言及する。2022年8月24日にプラハで開催されたICOM (国際博物館会議) で採択された新しいミュージアムの定義は次の通りであった。

「ミュージアムは社会に奉仕する恒久的な非営利機関であり、有形および無形の遺産に関する研究、収集、保存、展示、解明に携わるものである。この機関は広く公共に開放され、包括的な存在であり、多様性と持続可能性を促進するものである。ミュージアムは多様なコミュニティの参加の下で、倫理的かつ専門的な方法で運営されるものであり、閲覧者に教育、娯楽、考察、知識の共有の場を提供するものである。」

しかしフランスのミュージアムの総合目録を見ると、作品の95.8%が男性作家によるものであり、解説の94%が男性のアーティストによるものであるとい

う事実が明らかになった。またカルナヴァレ歴史博物館の最近の企画展のプログラムを見ても、「写真家アンリ・カルチエ＝ブレッソン展」、「作家マルセル・ブルースト展」、「女性たちについて」、「デザイナー、フィリップ・スタルク展」となっており、一人の男性のための企画展が三回開催されるのに対して、何百、何千の女性をひとまとめにした企画展は一回のみである。

このような実例を挙げて、フランスのミュージアムで女性がマイノリティ化されているという事実を指摘したバール氏は、ミュージアムの女性差別への対抗策をとった。2004年にアンジェ大学にフランスで唯一の女性ミュージアムとなるMUSEAを、バーチャルで創設したのだ。そして2009年にパリで最も入場者数の多いミュージアムの一つであるポンピドーセンターで、女性アーティストのみの展覧会 *elle@centrepompidou* 展が開催された。これを機に以後10年ほどの間にフランスでは、大きなミュージアムで女性とジェンダーへの関心が高まった。2022年にはこの問題に専門的に取り組む最初のフェミニスト団体 *Musé.e.s* グループが設立され、「フェミニストミュージアムのガイドブック」 *Un Guide pour un musée féministe* が発行された。

2. 企画展のテーマ

企画展のテーマについて、バール氏は以下のような見解を述べた。「パリの女性市民たち！ 女性解放のための闘い、1789年-2000年」というテーマは211年という長い期間にわたる膨大で複雑なものであり、教育的見地からフェミニズムの流れの時代区分と政治動向の周期を調整する必要があった。またパリという空間は多様性に富むものであり、郊外、地方、そして植民地や世界へと繋がる比類なき国際都市であることを考慮することも必要であった。

テーマの中心である「女性たち」という言葉についても、違和感を覚える人がいるかもしれない。「女性たち」という区分に対して、ジェンダーという概念がそれに答えることができると考える。出生時に「女性」と判断された人が、自身を女性であると必ずしも認識するわけではない。トランスジェンダーの人

を歴史のなかでどう位置付けるかという問題もあり、企画展ではこの複雑な問題への対応を踏まえて、いくつかの史料を提示した。社会のジェンダー秩序は、女性解放のダイナミズムによって転換を迫られているのである。

さらにここで取り上げたのはパリに生きた女性たちであり、シックでエレガント、洗練された都会的な女性といういわゆるパリジェンヌの神話とは異なるものであることは、言うまでもない。もちろん「現実」と「表象」、社会の歴史と虚構の歴史を完全に切り離すことは不可能であるが、神話は現実の事象と生身の女性から触発され作られたフィクションである。

企画展では女性解放の上で重要な役割を演じた女性や女性活動家、それは時と場合によって個人ではなく集団の場合もあったが、そうした女性たちを取りあげた。このテーマのために図像史料、著作、手書き文書、写真、絵画、調度品、美術作品、音声・映像史料など290点に上る史料が使われた。その史料の50%はパリ市（パリのミュージアムとパリ市の組織）の所蔵品、20%がカルナヴァレ歴史博物館のコレクション、さらに20%がマルグリット・デュラン図書館の所蔵品で、その他にフランス国内のミュージアムや公的機関、また個人の所蔵品も展示された。

3. 可視性と不可視性についての考察

さらにバール氏は女性の表象の不平等という問題に言及する。従来の女性の歴史は、多くの場合「偉大な人物」の羅列であったが、この企画展では無名の女性たちやその集団の活動にも焦点を当てている。また白人の歴史の陰で忘れられがちであった、黒人のフェミニズムの活動についても目を向ける。その一例としてレユニオン島（インド洋にあるフランスの海外県）での強制不妊手術反対の写真を提示する。そしてもう一つ黒人女性の例としてジョセフィーヌ・ベーカー（Joséphine Baker, 1906-1975, 歌手・ダンサー）を挙げる。彼女が2021年に「偉人」としてパンテオンに祀られた時には、第二次世界大戦でのレジスタンスの活動を強調するために、フランス軍の軍服を着た写真が選ばれた。

また女性の雇用の問題は企画展の重要なテーマである。1921年の生産年齢人口における女性の就業率は、パリで42%、郊外で33%、フランス全土では31%であった。パリの縫製労働者や自動車工場でストライキに参加する女性労働者の写真が多く残されている。それに対して家庭内労働者や使用人、その多くは地方や海外の出身者でパリにはこうした女性が多数存在しているが、彼女たちの闘いが取り上げられることはほとんどなかった、とバール氏は指摘する。

パリは女性が多い都市といわれるが、それはパリが「ヨーロッパの売春地帯」でもあるからである。売春婦も市民であり、彼女たちがどのように扱われているかという問題は重要である。ここでは売春宿の閉鎖を告知する1871年のコミューンのポスターと、1975年の売春婦たちの権利擁護運動のポスターが紹介された。

障害者の問題も忘れられたテーマである。障害を持つ女性への支援団体が最初に設立されたのは、2000年以降であった。もう一つ語られることがなかったテーマがレジスタンスの女性である。バール氏は刑務所で書かれた日記とレジスタンスの女性活動家が持っていた二重底のバッグを史料として提示する。このバッグは持ち主が自分で製作したもので、二重底のおかげで隠された文書は発見されず、彼女は命拾いをしたのである。

そしてこれまで女性が沈黙を強いられたテーマとして中絶の問題をとりあげ、2022年にノーベル文学賞を受賞したアニー・エルノー（Annie Ernaux, 1940-）の以下の言葉を引用する。「世界中で数えきれない数の中絶が行われていたにもかかわらず、何世紀にもわたって女性たちはその苦痛を表現し、記述し描写することを封印させられてきました。私は中絶をテーマにした絵画を一つも見ることがありません。ミュージアムでは多くの戦争、拷問や処刑を描いた作品を見ることが出来ますが、中絶はありません。表象の対象とはならないものがこのように存在するのです。」

一方、反フェミニストについての言及は、ナポレオン・ボナパルト（Napoléon Bonaparte, 1769-1821）が1804年に制定したナポレオン民法典を、

ナポレオンの専制政治に抵抗した著名な知識人で小説家のジェルメーン・ド・スタール (Germaine de Staël, 1766-1817) の巨大な肖像画の隣に、ひっそりと並べるといふ簡潔でアイロニーを込めたものにとどめたとバール氏は語る。また企画展を準備するにあたって、注意すべき畏があると氏は警告をする。それはこれまでフェミニスト的と見なされていた表象が、その背景を検証すると反フェミニスト的、あるいは商業的な目的を持っていたことが明らかになる場合があるからである。その一例として、サン＝シモン主義者の女性を嘲笑するために製作されたズボンをはいたサン＝シモン主義者の画像と、広告代理店が作成したパリの女性がズボンをはく権利を要求するデモを行うという、フェイク画像をあげた。

4. 研究史料としてのオブジェ

通常はアーカイブの検索を行う歴史家にとって、研究史料としてのオブジェを検索することは斬新な経験であり、多くの成果を得ることができたとバール氏は語る。これらのオブジェは芸術作品また日用品で女性たちを表象するもの、その闘いのためのものであり、彼女たちの所持品でもあった。企画展で展示されたオブジェの例として以下のものがあげられた。

フランスでの最初の女性参政権活動家であり、フェミニストグループ「女性参政権」Le Suffrage des femmesを結成したユベルティエヌ・オークレール (Hubertine Auclert, 1848-1914) の作成した幟、また女性参政権獲得をアピールするために製造、販売された石鹼、ブレスレット、帽子バンド、扇子、また1789年 (フランス革命)、1830年 (7月革命)、1848年 (2月革命)、1871年 (パリコミューン) の記憶が刻まれているルイーズ・ミシェル (Louise Michel, 1830-1905, フランスの無政府主義者) の刺繍入りの財布も提示された。

フェミニストの日刊紙『ラ・フロンド』*La Fronde*の創設者・発行人で、一種のカルト的人気を博したマルグリッド・デュラン (Marguerite Durand, 1864-1936) の死の床で撮影された毛髪も、大変興味深い品である。デュラン

は自身が創設した活動の場所で急死した。現在その場所に彼女の名前を付した図書館が設立され、名前のフレームが保存されている。

企画展では衣服が何点か展示されているが、これは女性の解放が衣服、身体
の解放であることを喚起させるからである。中でも1880-1890年代に起こった
女性が自転車に乗ることについての論争とアメリカ人のフェミニスト、アメリ
ア・ブルーマー（Amelia Bloomer, 1818-1894）が創作したブルマーと呼ばれ
るふっくらした短いズボンの着用を忘れてはならない。

さらにいくつかの彫刻が展示されている。最も注目すべきはカミーユ・ク
ローデル（Camille Claudel, 1864-1943, 彫刻家）の「レ・コウズーズ」*Les
Causeuses*という内緒話に興じる女性たちの表情を巧みに捉えた作品である。
女性同士の親密な関係性を表象するこの作品は、フェミニズムというコンテク
ストの下で新たな意味付けがされた。

5. 政治制度と女性たち

参政権と被選挙権の行使は重要なテーマであるが、1945年から2000年の時期
で残された図像は少ないとバール氏は述べる。パリの女性が最初に参政権を行
使したのは1945年の地方議会選挙で、10人の女性議員（全体の9%）が誕生し
た。その後数十年間は、女性議員の数が7人から13人という平等には程遠い状
況が続いた。パリの女性市長の誕生は、2014年の社会党のアンヌ・イダルゴ
（Anne Hidalgo, 1959-）まで待たねばならなかった。最高権力者、すなわち
大統領の座を女性が手にすることは、いまだに強い抵抗にあっている。大統領
選挙への最初の女性の候補者は1974年の「労働者の闘争」*Lutte ouvrière*（極
左政党）のアルレット・ラギエ（Arlette Laguiller, 1940-）で、この時は彼
女が壇上に立つことに重要な意味があった。

20世紀の初めに、女性が政治について公の場で話すことが難しいことを認識
していたフェミニストたちは、女性に弁論術を教授する学校を創設し、その写
真が展示された。しかし政治面での平等の権利を獲得してから50年を経た20世

紀末の時点で、国会議員に占める女性の割合は5%であった。そこでフェミニストたちは50対50を求めるパリテ法制定を求める活動を起こした。その訴えは広く共感を集め、2000年に法制化され憲法が改正された。しかしながらフェミニズムに再び活力を与えたこの重要な闘いでは、多くの討論会が開かれたが大規模なデモもなくメディアの報道も文書のみで、この革命を伝える図像史料はない。

6. パリ、文化の中心地

パリテ法制定に関する展示物の不在とは対照的に、パリにおける文化的、芸術的、知的生活の成果を通じて女性解放のダイナミズムを表現する展示物は、多すぎて選択に困るほどである。パリは女性たち、それも世界中から集まった女性たちに積極的に活動の場を提供している。文化の分野で女性の地位向上に寄与した女性個人、あるいは集団はあまりに多岐にわたるため、ここで要約することは不可能である。しかしながら一つだけあげるとしたら、写真家ジゼル・フルンド (Gisèle Freund, 1908-2000) が1948年に撮影した、最も著名なフェミニストの知識人シモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir, 1908-1986) の肖像と『第二の性』*Le Deuxième Sexe* の原稿の写真であるとパール氏は述べている。

7. 空間の次元

バーチャルな空間での女性解放の闘いは、財源が常に問題となり国や地方自治体の補助金が必要となる。マルグリッド・デュラン図書館とその蔵書は、フェミニストの活動を象徴する主要な場所であり、特別な空間を体現するものである。しかしパリで女性解放を想起させる彫像が公的空間に展示されている例はほとんどなく、リュクサンブール公園の作家ジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-1876) の像、また共和派のフェミニスト、マリア・ドレーム (Maria Deraismes, 1828-1884) の像が私的な庭園にあるだけである。そして

過去20年をみると、通りや広場の命名は男性の占有事項ではなくなってきたが、女性の名前が命名される場合は、公平性に配慮をしたという意図が透けて見える場合が多い。2001年にパリの通りで女性の名がつけられたものは6%であったが、2020年には12%になった。この増加はパリ市で左派が政権を握ったことに関連する。しかし「12%はないよりましであって、それで十分ということでは全くない」とバール氏は強調する。

8. ファーマージュ

講演の締めくくりとしてバール氏はファーマージュという言葉あげる。ファーマージュとはオマーージュに対抗する言葉としてフェミニストが発明したもので、デジタルデバイス上で表示されている。オマーージュは日本語でも「オマーージュを捧げる」といった表現で使われるように「敬意を表する」という意味である。しかしオマーージュhommageという語はhomme（男性）へ敬意を捧げるという語で、女性は「敬意」の対象とはされていないとフェミニストは指摘する。そこで女性、femmeへの敬意を表すファーマージュfemmageという語が作り出されたのである。

最後に2022年にフェミニズムミュージアム設立のプロジェクトが生まれ、バール氏が準備委員会の代表の一人であることが報告された。このミュージアムはフェミニズム文書センターの所蔵品を中心に構成され、アンジェ大学図書館内に設置される予定で、最初の収蔵品としてカルナヴァレ歴史博物館での企画展の調査の過程で発見された、第三共和制の時代（1870-1940）でのフェミニスト的場面を描いた絵画が紹介された。

おわりに

バール氏の講演はパリにおけるフェミニズムの歴史を絵画、ポスター、写真、また様々な日用品や衣服等を史料とし、さらには通りや広場の命名という空間

の次元にまで言及して論じるという大変斬新なものであった。講演会の開催が大学の春休み期間であったこと、また対面のみで行われたこともあり、参加者は16名と少数であった。しかし対面での講演会であったゆえに、参加者はバール氏の講演から彼女の研究への熱意を直接感じることができた。コロナ禍で主流となったオンラインでの講演会では得られぬ貴重な体験であった。

バール氏の講演に対して会場の参加者からは「女性市民」の定義について、またフェミニズムミュージアムについて、さらに女性の表象、また社会活動に関して等多様な質問が出され、バール氏と活発な議論が交わされ大変有意義な講演会であった。